

## 第5編第二章 「乱菊模様の作り方」



---

### 布片の切り方

花：赤、桃、白、肉色（薄いピンク）から選ぶ。

1寸3分10枚、1寸8枚

葉：黒味のある緑色絹、5分50枚

額：葉の色より少し薄い緑、3分5厘7枚

---

### 摘み方

花卉：角摘み、きわめて腰の低い

折先が広がらないように注意して糊板に置く。第1の折りの時に十分指先に力を入れ、折り目を強く抑える。第2、第3も同様にする。腰を切るときは、折先を切らないようにすること。

葉：筋入り摘み、腰切り

---

### 下台の作り方

下台：第一章野菊と同様

---

### 葺き方

花：摘みの折頭から折先までをピンセットではさみ、下部についている糊を、左の中指薬指の間でよくふき取る。折下と折り先が開かないようにピンセットから中ほどまで引き出す。摘みの反り曲がり指で作る。左に沿ったり右に沿ったりは図のようにする。

額：開いた花には6枚、半開には1枚を広げる様に葺く。

葉：前の菊同様。大葉は13枚、中葉は8枚または5枚、小葉は3枚。

【原文まま】

## 第二章 乱菊模様の作り方

摘み細工でも同じ摘みを用いて、色々同じようなる花を細工することができるのです。それは摘みの数の増減と又、寸法の切り方で種々に変化をさすることが自由であります。すなわち前の科の花等も中にまた一と側を増せば、花の形が込み入りたる花となります。又、前に述べたようにして下台に突起したる傘台を張り付けてその上に段葺きにすれば、更に一層美しき花となります。かように種々の花のみもつくせぬというてよいぐらいであります。今ここに述べます花は前の野菊と異な意まして、用布も大きく切り、又その摘みも扱い方も違えて致しますれば、全然格好も異なりました花となるのであります。かくのごとく考案しますれば、それだけ目先の変った面白い意匠のものができるのです。これらは、いまだ初学の者であって、さほどではありませんが、これはこの技術について工夫ということが大切なることの参考までに、あらかじめ述べおく次第であります。

---

### 布片の切り方

花：いずれにでも自分の望むところの色にて菊の花の咲き乱れたのを拵えるのでありますから、まず下台に配合のなきものなれば、菊の花に特有する色のうちにて、黄赤桃白肉色の内を選びて一寸三分の角に十枚と、一寸角を八枚の二通りに切るのであります。

葉：色は菊の花の咲き乱れた時の葉の色でありますから、それに似つくべく黒味のある緑色絹を選びて五分角に五十枚切りおきます。

額：三分五厘角に七枚切るのですが、これは葉の色よりは少しく薄色の緑絹を用いねばなりません。

---

### 摘み方

花卉：極めて腰の低い角摘みにしまして、折り先を広がらぬように注意して糊板に並べおきます。この摘み方について、ちょっと注意を致す必要があるのです。それは、この摘みは前の野菊の時の摘みから見ますれば、布片が三、四倍の大きさになりますから、大変に摘みにくい感じがするのです。そして、又実際に扱いにくいのです。前の小さい摘みから見ると、ピンセットで折っても指先に布片が出るので、折り頭の格好を作ろうとすると、折り先が不ぞろいになりましたり、又、折り上の参列の所が凹凸になりましたりなかなか思うようになりませぬ。それゆえに、第一の折り方の時に十分指先に力を入れて折り目を強く抑えおくのです。次に二度

目を折る時も同じようにして折り目の整然とするようにして、第三を折るのです。かくすれば必ず十分に正確の摘みをうることができますのであります。それから、次に、その腰を切るのです。この切るのも小さき摘みなれば別に難しくはありませんが、大きい摘みになりますれば、高低ができて、細工の上にそれが明らかに現れて、恰好の良くないものとなります。それから又切る時の注意は、折り先を切らぬようにせねばなりません。不慣れのうちは、自然折り先までも切るようになりますから、せつかく寸法を定めて切りました布片もそれだけの用をなすことができぬようになります。畢竟、折り先を一分切り込めば、一寸三分のものも一寸二分の用をなすにすぎないのです。かかる場合は、寸法を定めて書き載せたものも、それだけのものにまとまらぬという結果に終わりますから、その切り方は初学より注意を要すべき仕事であります。これはハサミ使いを十分に注意すべきゆえんであります。

葉：線入り摘みの腰切りとなしてよく揃えて並べおくのです。

---

#### 下台の作り方

下台：前の野菊と同じようにして茶色を巻きたる針金を下絵の枝の部分に張り付けておくのです。

---

#### 葺き方

この乱菊は、花の十分咲き乱れておりまする格好を現わすのでありまして、屈曲の変化の有様を現わすものでありますから、摘み一枚ずつよく形をつけて風致を添ゆるのでありますから、その仕方をここに述べます。

この花の如く長く大きなるつまみを用いる咲く方は種々の方面に用いますゆえ、練習の手段として十分に説述いたします。この乱菊の花は規則がありてなきような恰好でありますから、初心の者でも自分の意に任せてこしらえてもさして出来栄えには関係を生じませんが、一定の規則立ちたるもの、鳥の尾、魚の尾、又は花なれば菖蒲の葉のごときに用いるときは、自然用い方に注意を要しますから、この科においてよく用い方を心得おくことが必要であります。まず、物体に葺きつけんとしまする時に、摘みの折り頭から折り先までを一体にピンセットにて挟んで、その摘みの下部についてある糊を左の中指と食指の間に手よく抜き取るのです。そして、よく折り下折り先の開かぬようにしてピンセットから中ほどまで引き出して、なおその指先の加減で摘みに反り曲がりの形を付けるのであります。すなわち、下絵にある如く花卉の右に反り、又は左に反っておるものはこの時の指先の加減で現れるのであります。かくのごとくにして、順次に花形をつけ、終わらる時は、次に額を開き花に六枚ずつの線入り摘みをつ

け、半開には一枚を広げるようにして著けるのであります。葉は、前の菊と同じ順序で大いなる葉は十三枚の摘みを用いて一と葉となし、中葉は八枚のものと五枚のものをつくり、小さき葉は三枚の摘みを用いて著けるのであります。